



ショートコメント

★★★

Data 2024-18

一月の声に歓びを刻め

2023 年／日本映画
配給：東京テアトル／118 分

2024（令和6）年2月17日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本：三島有紀子

出演：前田敦子／カルーセル

麻紀／哀川翔／坂東

龍汰／片岡礼子／宇

野祥平／原田龍二／

松本妃代／とよた真

帆／長田詩音

みどころ

商業主義がはびこる今の日本の映画界でも、“作家主義”にこだわる監督は多い。三島有紀子はその代表格の1人だ。もっとも、作家性だけを貫いたのでは現実を生きていけないから、一定の商業主義とのバランスも不可欠だ。

そんな彼女が成功させた『幼な子われらに生まれ』（17年）や『繕い裁つ人』（15年）とは一線を画し、自分が6歳の時に受けた「性暴力事件」と向き合い、「今までの自分ではなくなった」ことの意味を映像化したからビックリ！

その3つの物語から構成される本作は一瞬、オムニバス映画？と思ってしまいが、さにあらず！すると、3つの物語（エピソード）の関係は？こりゃ難解！彼女の体験に基づく、この思い、この映像をどう受け止めればいいのか？私にはそれがサッパリわからないまま・・・。

◆三島有紀子監督の『幼な子われらに生まれ』（17年）（『シネマ40』102頁）は素晴らしい映画だったし、『繕い裁つ人』（15年）（『シネマ35』未掲載）も、まずまず良かった。私は“商業主義”に毒されてしまっている今ドキの日本の映画界にあって、これほど“作家性”に固執する女性監督は珍しいと思い、彼女に注目していたが、『一月の声に歓びを刻め』と題された最新作は一体ナニ？ひょっとして、これは宗教絡みの映画？いやいや、本作は彼女自身が47年前の6歳の時に受けた“性暴力事件”をテーマにした映画だと知ってビックリ！

◆パンフレットにある監督インタビューによれば、事件が起きたのは大阪の都心ど真ん中にある、堂島。私もよく知っている場所だ。そこで、性暴力被害を受けたことによって、彼女には「今までの自分ではなくなった」という喪失感が起こり、「もう自分は自分じゃない、汚れてしまった、生きていく価値なんてない、自分の体を抹消したいという欲求が生じ」たらしい。しかし、彼女はなぜそれを今映画に？本作を鑑賞するについては、そのこ

とをしっかりと考えたい。

◆本作は「第1章」の字幕が流れた後、父親のマキ役に扮しているカルーセル麻紀が、北海道の洞爺湖のほとりで、遠くに見える中島に向かって、「れいこ……」と囁く姿から物語が始まっていく。といっても、その物語は、一人住まいをしているマキの家に家族が集まり、マキ手作りの御節料理を食べるだけのものだが、第1章のポイントは、6歳でこの世を去った次女れいこへのマキの喪失感だ。カルーセル麻紀といえば、「日本人として初めて性別適合手術を受けた人」、「戸籍を男性から女性にしたパイオニア」、そしてニューハーフタレントの“走り”として有名だが、スクリーン上に見る俳優カルーセル麻紀の姿にビックリ！

◆続く「第2章」では、東京の八丈島を舞台に、哀川翔扮する「とっちゃん」こと父親の誠と、5年ぶりに帰省してきた娘の海（松本妃代）との間で何とも悩ましい物語が展開していく。しかし、第1章と第2章との関連は？そう考えながら見てみると、続いて私の大好きな女優、前田敦子が登場する「第3章」が始まるので、アレレ、こりゃ一体どうなってるの？

予備知識のない私は全く知らなかったが、本作はそんな3つの物語（エピソード）から構成された映画なのだ。しかし、パンフレットの監督インタビューを読むと、この3つの物語は「オムニバス映画ではありません。ジャームッシュ、ロメールなどのようなオムニバスの遊戯性というよりも、3つの孤立した存在を声の派生でつなげたいという思いで作られた3話です。」と書かれているから、ややこしい。本作は監督だけでなく脚本も三島有紀子が担当しているから、その“作家性”を如何なく発揮しているわけだが、こりゃ難解！しかし、第3章を見ていると、まさにこの第3章こそが彼女の体験を下敷きにした衝撃のオリジナルストーリー！！

◆「今ドキの若者は！」と言い始めることは老化現象の最たるものだが、近時の私はその傾向がますます強くなっている。安モノのアホバカ（？）お笑い芸人ばかりが席捲しているTV界を見ているとついそう思ってしまうし、オレオレ詐欺や迷惑動画等に見る、今ドキの若者の馬鹿さ加減を見ていると、どうしてもそう思ってしまう。

しかして、本作「第3章」に登場する「トト・モレッティ」と名乗る“レンタル彼氏”稼業をしているという男（坂東龍汰）を見ていると、まさにその典型！ところが、前田敦子扮するれいこは、そんな男を買って一緒にホテルに入っていくから、アレレ、アレレ……。私には三島監督の苦しみや問題意識の深さを理解することは、とても、とても……。

2024（令和6）年2月20日記